
もう一つのD灰

呪いのマリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つのD灰

【Zコード】

N7669C

【作者名】

呪いのマニア

【あらすじ】

未来を左右する少女・・そのせいで千年公に狙われてしまう・・何人も人が死に自分を責める主人公・・切ない恋の物語

(前書き)

今回はD・Gray-manの話をベースに話を作りました^_^今回はなぜか外国語が多くでてきます；イタリア語・英語・ポルトガル語・・・まあ気軽に読みください><
あ！！でもD・Gray-manを知らない人はあまり話がわかんないと私はいます；

また・・会えるかな・・・・あんなこと言つたけど本当はコウの事
大好きなんだからね・・

一年前

「神田～」

「ソモエか・・なんだ??」

「ソモエか・・ってなんだよー」

「別に・・」

「ふーんまあいつか・・あーそつこえれば神田黒の教団に行くつて本
当?/?」

「ああ・・明日発つ・・」

「えー明日つてそんないきなりー」

「すまん・」

「そつか・・・・・・・・氣おつけてね・・明日見送りに行くから」

「・・あいがといへ」

「！・！・！神田が人にお礼言つなんて・・めずらし～」

「ツてめえ人を馬鹿にしてんのか！・！」

「あはは～してないよ～」

「（怒）」

「！」あんつてば・・

「・・・・もういい

「え・・・・ちよつと神田ーー！」

呼び止めたのにコウは帰つやけつたんだよね…まあつりが悪いんだ
けど：

次の日コウは沢山の人に見送られてた・・・

昔はあるの田つきの悪さで友達居なかつたのに・・・凄いな笑

「・・・」

あーあ泣けてきたよ・・・本当に行つやううんだなコウ・・・

私強くなるつて決めたのに・・・

こんな弱い私・・・見せたくない・・・

・

「じゃあなコウ・・・ばいばい・・・」

コウの顔を遠巻きにみて言った・・・

これでいいんだよね・・・

?

〈神田視点〉

「・・・つち・・ソモ工遅せえな・・・」

「神田様時間です・・・」

「・・・ああ

あこいつのひとだから寝坊でもしたんだろうな・・・

「「じやあね神田ーー。」」

村のひともたちが見送る中神田の乗った列車は動く・・・

「・・・つ・・・」

神田の頬を涙がつたう・・・

「神田様？？」

一緒に乗っていたファインダーがこえをかけたが

「なんでもねえ・・・」

つといつてかえされてしまった・・・

やつぱり神田もあんな顔だけど人間なんだよね；

＜自分＞

その頃私と言えば・・・

「ユウ・・・」

一人寂しく部屋で泣いてます；

「私もエクソシストだったらユウと一緒にいたのにな・・・」

それはどうじょも無い事・・悲しい運命・・

私は何日も何日も泣きつけた・・・

それが事の始まりだつた・・・

「・・・・・」

「なにがそんなに悲しいのですか?」

「え・・・・だれ・・・?」

「私の名前は千年伯爵^ガテス」

「せんねんはくしゃく?・」

「セウ^ガテス」

「ユウ^ガ居なくなつちゃつたんだ・・・」

「ユウとはダレですか？」

「私の幼馴染なの・・でも黒の教団に行つちやつた・・」

「エクソシストですか!!」

「おじさんエクソシスト知つてるの??」

「おじさんはよくないですヨ・・ええ知つてまス」

「ユウはなにも教えてくれないの・・ねえエクソシストって何?」

「・・それハ・・我輩も教えられまセン」

「なんで・・君が必要だからでス」

「必要・・・?私が?」

「はイヘヘ貴方には未来を左右する力があるんでス」

「未来を・・・そんなに凄い力なの?」

「ええ常識破りなほど強大な力デス」

「へえー」

「その力を使えばエクソシストなんて簡単に殺せますそのエクソシストも一生貴方のものデスヨ」

なにいつてるのこの人・・・

簡単に殺せるとか・・・

それにエクソシストって・・・

ユウも殺されちゃうじゃない・・・

「ユウを殺すなんて私が許さない・・・そんな貴方に力を貸すつもりもない・・・」

「・・・それなら・・力ずくですネ」

千年公はいきなり変な物体を出してきた・・・

「なにこれ・・・」

「教えてあげましょ！」これはAKUMAといつものです」

「AKUMA・・・これが？」

「なんていってる暇ない！－ヤバイ攻撃される！逃げなきや・・・

！－！

「逃がしませんヨ」

私は護身用の拳銃をAKUMAに向かつて撃つた

「これでくたばつただろ・・・」

「そんなのAKUMA達に生きませんヨAKUMAを倒せるのはH
クソシストだけですからネ」

なんで銃がきかないんだよ！！

「・・・助けて！！！師匠！！！」

まあ私の師匠じゃないけど；

師匠は今絵でも書いてるかな
・・・

その頃師匠は

「・・・・?・・・・ソモエの声が・・・・・?」

ソモエはユウ君が教団に行つてここ数日元気が無かつたな・・・

・・・・・！！！モレモレ・・・

悲しみに千年公が目をつけたかもしねい・・・

そう言つて師匠はソモエの元へ向かつた

ソモエはもつへトへトで反撃する力・逃げる力さえ残ってはいなか
つた・・・

「師匠・・・」

でもAKUMAは私に攻撃する・・・

「ゴウ・・・・ もやあああ

AKUMAのもつた刃物が胸に直撃

「やはり解毒できますか」

解毒・・・?何それ・・・

「教えてあげましょウAKUMAに刺された人間はAKUMAのウ
イルスに感染して
自分もAKUMAになってしまいますんですヨ」

心を読むな・・・

「でモこれで最後モス 貴方をホームへ連れて行きまス

「 やゼーーーーー

「 わうわせませんよ・・・

「 師匠ーーーーー

「 ・・・・・ 邪魔者が入りましたネまた迎えにきますよソモエー

そうじつて千年公は消えた・・・

師匠が来なかつたらどうなつていただろつ・・・

結局私つて弱い・・・

この数日泣いてばっかりだし

強くなるんだ・・・ ュウに負けない位・・・

「無事ですか・・・？」

「あ・・・はい・・・」迷惑をおかけしました

もう人にばっかり頼らない

「無事ならなによりです」

「あつがどうぞあります・・・それじゃあ失礼します・・・」

「あーソモエ今のやつには氣をつけてくださいね・・・」

「了解しました」

私は早足で帰った・・・ここにちやいけない・・・そつ実感した

AKUMAとの戦いで何人ものひとが死んだ・・・私のせいだ・・・

「ソルを出よ・・・」

さつそく準備をはじめた・・・明日の夜明けまでには発とう・・・

<神田視点>

「神田君ーー」

「・・・・・っちはんだよコムイ・・・」

「こわいなーつじやなくて君の故郷を千年公が襲撃して大勢の人が亡くなつたそうだ・・・」

「・・・・・死亡者の確認は・・?」

「何しろ酷い死体で身元が確認できないんだ・・・でも・・村の半数の人がなくなつたらしい・・・」

「・・・一人してくれ・・」

「・・・・・・・・」

「コムイは何も言わず俺の部屋を出ていった・・・」

「村の半数だと・・・?・・・!・・・ソモト・・・」

静まりかえった村・・・一人走る少女の影・・・

「ぱぱあつああーーー（車のクラクション）」

「あやああーなんなのよーってかいじりじりょー」

村を出たのはいいが何処に行けばいいかわからない

ひとまず人に話を聞く・・・

「すいません・・?」

「benarriavator（べらりしゃこまわー）

「は?」

聞いたことも無い言葉・・・けは・・・もしかして・・・外国!・・・

!!

「cosas?」（「うかした?」）

「なんなのよ~」

「micas que appone?」（もしかして・・・日本人
?）

「どうしたらいいだら?・・・勉強しつければよかつた~」

「so-happonesse parlare ab.」（日本語はな
せぬひと~）

「何喋つてゐんだら?」

「atte」（できるよ~）

「あ~の~?」

「アナタハニホンカラキタノデスカ?」

「え・・・日本語・・?・・はいそうです」

「ワタシスコシシカーホンゴシヤベレナイ・・・」

「やつか・・・ルリばざりですか?」

「ハハハイタリアテス」

「イタリア・・・」

「ド」ヘイキタイノテスカ?」

「ちょっとわけがあつて村を出たんです・・・」

「一気に雰囲気を悪くしてしまつた

「すいませんそんな話して・・・」

そういうひとやつしきの人が

「キミハワタシガメンンドウミテアゲル」

つとはつきりいった

「いや・・・そんな・・・」

見知らぬ人を頼るなんて無理だ

赤の他人だし・・・

「ヒトハササエアッテイキテイクモノダヨ」

その言葉でこの人が死んでしまった母さんに見えた・・・

「ねえソモエ・・・人という文字は人と人が支えあってできている
のよ・・・
だから困っている人がいたら支えてあげなさい」

母さん・・・

強くなりたい・・・

やう思ひのこ

涙が出るのなぜ?

「・・・・・」

泣いた・・・泣いた・・・これ異常ないほど泣いた・・・

「めんなさい

今は弱い私で済ませてください・・・

「・・・・・」

眠つてしまつたらしご・・・

「オキタカイ？ サアキョウカラハタライテモラウマー。」

「え・・・やどりてくれるんですか？・・・」

「メンドウハミバトイツタジャナイカ」

「ありがとひ・・・」
「ぞこます・・・がんばります！！」

「いじから私の新しい生活が始まった・・・

あれから一年・・・イタリア語もだんだんなれてきた

そして今日またまたお金で旅行に行く

「La veada」(うめあわせ)

「Acquisiscamento」(気をつかう)

「Samporavé」(はー)

私の旅行さきは霧の都ロンドン

その頃の私は忘れていた・・・千年公のことを見た

ロンドンに着いて汽車を降りて町を散歩していくと

「夜郁ソモニ・・・確保します・・・

「・・・AKUMAなんで」「なんと」

長い間見ていなかつたAKUMA

・ひたすら逃げるけどやつぱりAKUMAのまづが速いに決まってる・

でも・・・

「抵抗スルトコロシマスヨ・・・」

「やつてみなをこよ・・・」

逃げてみせる・・・！」

町の人を搔き分けながら走る・・・

「は・・・つは・・・はつは・・・」

逃げ切った・・・

「ふう疲れた・・・」

ユウ・・・

今何処に居ますか？1年前の事故が私のせいと知つたらユウは私を嫌いになるよね

だからユウの力・

ううんダレの力も借りないで私は千年公から逃げ切つてみせる・・・

「 」

腹の虫が // / / / ! !

ウツラカムヒ

「ロンドンって・・・英語通じるかな？」

「The order?」（ご注文は？）

「I hope the cheese hamburg steak
and the salad.」
(チーズハンバーグとサラダお願いします)

「It stood on ceremony. (かしこまつました)

ちよつとこから料理が運ばれてきた・・・

「おこしゃれいっただきませ」

つとこつて一口たべた

「つま...檄ウマ...」

眺めも良こしくこりう...

「待ちなさこAKUMA!..」

幸せに漫つている中

聞き覚えのある単語で身震い・・・

AKUMAと戦つてゐたことは……エクソシスト……

髪が白くて目がきれいな男の子のあとに

長い黒髪をポニーテールしている……

ユウ……

「……嘘でしょ……こんな所にユウがいるなんてありえない……」

一人の少年はAKUMAをいとも簡単に倒し

「のレストランでお皿を食べるやうじ……

「来ないでよ……きずかないで……」

身を潜めていると私の机の近くにある窓ガラスにAKUMAが突っ込んできた

「夜郁ソモエ……ミツケタ……」

「えー、なんでこんなにタイミング悪くーー！」

ユウたちもこのAKUMAにきずいたらしい・・・

私は帽子を深くかぶり窓から逃げ出した

「ソモニ・・・アナタヲホームヘツレテイク」

「いや・・・ひとまずたら?」

「ムリヤコニテモツレテイク・・・

「ひどいわね・・・私あなたを攻撃したくてもできないのよ?..」

「ソシナノシッタ」「トカ・・・

血も涙もないな・・・・

「大丈夫ですか?ーー!」

遠くからさつきの白髪の男の子が叫んでいた・・・

つて事はユウがどこかに！！

「ヨソミヲスルナ！」

「あやあつああ」

見事命中・・・出血酷いな；

「大丈夫ですか！？？？」

あ・・・田髪の子・・・つてかユウは？

「えへへ・・・大丈夫じゃないかも。。。」

「今手当しますからーー！」

「いいよ大丈夫だから・・・キミ・・・名前は？」

「大丈夫じゃないですよー！……アレンウォーカーです」

「大丈夫だつてば……出血は酷いけど……そここの変なの後はよろしく」

「まつてくださいーー貴方名前は？」

「……名前……コキだよ」

とつむいでた私のお母さんの名前……コウにはばれちゃつかな？

「おいそここの女ー！チヨットまで……」

この声つてもしかして……コウー？つかAKUMAがいなくなってるー？

もしかしてコウが倒したの……？

「はい……なんですか？」

「最悪だ・・帽子かぶつてるからばれないかな?」

「ホームへ連れて行くとはビックリの事だ・・理由を話せ・・」

「嫌です・・・」

「話せって言つてんだろ!-!-」

「ちよつと神田-・」

「やだな・・・会いたくなかった・・・

「ユキです・・助けてくれてありがとう・・・でも理由はいえない・・・」

「なんだと・・・!-!-」

「・・・!-!-神田!人には知られたくない過去だつてあるんですよー!」

「めん・・・私のせいで・・・皆・・・

シンジヤツタ・

「・・・じめんなさい・・・」

「ユキ・・? 大丈夫ですよ?・・・ 神田謝つてくださいー!」

「・・・うち・・なんで俺が・・・」

「せやべー!」

「・・・すまなかつた」

「'いめんなさい・・・」

謝ることしか出来なかつた・・・

昔の私だつたら、涙で泣いてたんだろうな・・・

「良かつたら僕らのホームに泊まって行きませんか?」

「え・・・」

「モヤシ何言つてんだテメ・・・」

「だつてこんな格好じや歩けないでしょ？」

たしかに・・私の服には泥と血がべつとり付いてるのが状況・・

こんなので町を歩いたら完璧に不審者・・・

「お嘗葉に甘えさせていただきます・・・」

「はい」

アレンは一カツヒと笑うといきなり私をお姫様抱っこした／＼／＼

「なつ・・・」

「黒の教団まで結構ありますから・・・」うちの方が速いでしょ

「…………めんどくせえもんつれて来やがって……」

「ユキは神田の部屋で寝ていただけますか？』

僕の部屋にはもう1人エクソシストが寝てて狭いんですよ……」

「え・・神田さんの・・・？」

「テメエ何考へてんだ！－！」

「決定ですね」

〈数時間後〉

「着きましたよ」

高い崖の上に黒の教団はあった……

「冗談じゃねえなんぞ俺がこいつと……」

「うまこつまでもぶつぶつしていた

「『マイセーんあけてくだせー』」

「解一

「一人して無視してんじゃねえぞー。」

「決定事項ですよ神田、コキの」とたのみますね

「・・・・うち・・・付いて来い・・・」うちだ

コウ・・・なんか昔より恐くなつた・・・

コウのへやはベットと蓮の置物しかない殺風景な部屋だった・・・

おまけにクモの巣が・・・

「えっと・・・神田さんって名前なんていうんですか？」

「…………」

「ゴウさんですか・・・ゴウさんってよんでも「呼ぶな・・・」

「え・・・」

「よんだら切る・・・」

昔のゴウは「んなに恐くなかった・・・

なこをおひでるの・・・・?

夜になつてゴウはどこかに行ってしまった・・・

「暇だなー」

深く深呼吸・・・

夢をみた・・・恐い夢を・・・（アンソロギックトブ

ルー替え歌（笑））

居なくなつた貴方にむけた・・・

「助けてと」叫んだのに

ダレも来なくて

剥き出しの一人の夜

逃げるしかできなくて・・

ただ一人走りながら自分を・・

責めてた・・

自分のせいだと

ずうっとせめていた・・・

A K U M A が私を追いかける・・・

失つてしまつた大切な人を・・・

自分の犯した罪を背負いながら

ねえ生きて・・・いくだけ・・・

「おい・・・なんの曲だ・・・」

「え・・・」

後ろにはさつきまで居なかつたユウが居た・・・

•
•
•

何も言えず無言で立ち去っていた

「…………てめえなんでさつきAKUMAに連れて行かれそうになつてた…………？」

「」

「なんでなんだ・・・・・?」

• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •

何回コウに何でだつと言われただらうか

もう隠し通せない

喋るしかないか・・・・・

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・わかったよ・・・・・
今から私が追われる理由を包み隠さずすべて話す・・・
でも多分それを聞いたら神田は私を嫌いになる・・・・」

「うう言つとコウは不思議な顔をして

「なんでだよ？意味わかんねえぞ・・・・・？」

つと言つた

私はそのまま気づかないでいて欲しい

「わかりたくないても話を聞けばわかるよ・・・・・」

「は・・・・？」

嫌われちゃうな・・・・・

「一年前日本に千年公が責めて来た・・・その現況が私なんだ・・・・・

・・私のせいで村の人たちがほぼ全滅・・・・・私が千年公なんて奴に会わなかつたらつ！！」

「・・・・・なんで千年公に追われてんだ・・・？」

「千年公いわく私には未来を左右する力があるらしい」

「未来を左右する・・・・・？」

「相手の過去を変えその人物が存在しなかつたことにする・・・・・

- 過去を変えられたものはじき死ぬんだ・・・・・
- 過去を変えエクソシストを皆殺しにしろつていわれた・・・・・
- でも私はその計画を拒んで逃げた・・・・・・でもどうしてもその力が欲しくて・・・・
- こんな所まで追つてくるんだと思ひ・・・・・

「・・・・セウヒーとか・・・・・」

「・・・・・つ・・・・」めんなさい・・神田の大切な人沢山・・・シン
ジャッタ・・・・

強くなるのに

そう決めたのに

私は泣いた・・・

「・・・ソモエ・・・」

えつ・・・

なんで私の名前を呼ぶの・・・?

「神田・・・ソモエって・・・?」

・・・神田はなんて言うのかな・・・

「・・・幼馴染・・・俺の大切な人・・・」

え・・・嘘でしょ・・・

タイセツナヒトツテドウイウイミ・・・?

「やのヒトの」と好きだったの?」

「やうだな・・・好きだった・・・」

・・・ありがとう・・・

こんな私なの?・・・・

「つか俺なんで!」んな事まで喋つてんだよ・・・・

「ハハ・・・・」

その時私は初めて帽子を取つた・・・・

「ソモヒ・・・?」

「ハウ・・・会いたかった

「なんで・・・」

「ユウヒに会つたら嫌われるかと思った・・・」

「嫌いになんかなんねえよ・・・」

「ああこだいらゴロの腰の中

「ユウヒ。」

「・・・これでじょかつた・・・」

「・・・うそ・・・あいつがどいつも

「ンモヒ・・・アリトドリーリーなどみな

「・・・それせ」

「それせ?」

「…………できない…………」

そういうとゴウの顔が険しくなった

「なんでだ！…………なんで…………？」

怖いけど我慢…………

だつて…………

「ゴウが殺されるから…………」

「…………？」

「ゴウを私は守りたい…………私を追いかけて千年公が来る…………」

「それがどうしたってんだ！」

「AKUMAも強い…………何人もの人人が死ぬ…………それはイヤ…………」

「

「俺が守るから……」口に呟く

ユウの話を聞きながらみじたくを整える

「万が一ユウが私のせいだ死んだら私生きてこけないから……

「おまえ……」

「好きだから死んで欲しくない……やつ狂つのせこけない事? ……
・

「……」

「じゃあねユウ……死んじゃヤダからね……

静かにユウの部屋から出て行った……

そして静かに……涙を流した……

一度田のさみなら……でも前のわよなりよつづらかった……

「何処に行こうかな・・・」

一人町をふらついていると・・・

「そこのお嬢さん風船はいかがかね」

真っ赤な鼻のピエロが言った・・・

「どうせ・・・」

・・・風船なんて何年ぶりかな・・・

ピエロは私に優しく微笑んだ・・・

グシャア・・・ベチヨ・・・（人の骨が碎け肉が削げる音）

鈍い音を立てピエロが倒れた

ピエロの額にはペンタクルが浮かんだ

「え・・・」

「ソモエ・・・・・・・・ミツケタ・・・ジャマモノハイジョ・・・

心の優しそうなピエロ・・・・

優しかったあの笑顔・・・・

私はまた人の笑顔を奪ってしまった・・・

もしかしたら本当のAKUMAは私なのかもしれないな・・・

こいつだけは許さない・・・・絶対に・・・

「AKUMAめ・・・好き勝手に殺しやがって・・・許さない・・・

「ユルサナイ? オマエゴトキーナー! ガデキル! !」

「To the poor devil whom the wo

rld dies out when is born on
his ground , and the below
ed person follows God ,
and the moon and the sun rotting
away share me with the devil ,
and die as for the evil there
lief of the soul . . .

(この地に生まれ、愛する人は神に従い私は悪魔と朽ち果てる月と
太陽がともにする時この世は滅び悪は死す哀れな悪魔に魂の救済を
・・)

「ウアアアツアアアツアア――――――――――――ナニ・・・ヲ
シタ・・・・・」

「あなたの存在をこの世から消し去つたの・・・」

「ソンナコトガデキタノカ・・・・フカクダッタ・・オマエヲユル
サナイ・・・イキカエツテモオマエヲオイツヅケル・・・」

「お好きにござおぞ・・・・」

「ああああああああつあつあ！－！－！」

悲鳴とともにAKUMAが消えた・・・

「AKUMAを倒したいんじゃない・・・私はノアを倒したい・・・それが私の願い・・・」

ノアを探さなきゃ・・・」うこう時に力をつかおう

「Show the only position that I look for」（私が探すものの位置を示せ・・・）

光りが示す方向とは・・・

「時計塔！！」

急がなきゃ・・・

「今日はハズレだつたわあ～エクソシストも弱弱だつたし～」

黒のフリルのワンピースを着たかわいらしい女の子に見えるが・・・

額にはノアをあらわす十字架の跡・・・

「みつけた・・・」

「んー、セーラーのボダーレ？？」

「私の名前はソモエ・・あなたは?」

「イノセンスの反応が無い・・もしかして普通の人間なの〜?
人間なのに私に向かってくるなんていい度胸ね」

「・・・質問に答えて・・・」

「まあデカイ態度……私はノアの一族「殺氣」のユリア・メモリー……」

卷之六

「きやはせ一人間の分際でどう攻撃するの？まあいいけど……」

「・・・・火よ・・・」の者を焼きはらえ……」

何処からともなく炎が現れユリアを囲みもうもうと燃えた・・・

・・が・・

ユリアには傷一つ付かなかつた・・・

「・・・・!…ビリ」「!」と・・・?」

「あんたね、私は完璧な人間・・・ノアの一族なんだよ? そんなの利くわけないじやん」

「うしたら・・・・・ビリしたらいいの・・・」で負けたら意味が無い・・・

勝たなくちゃ・・・どんな手を使つても・・・

「・・・ I sentence this person to
a death warrant」(私はこの者に死の宣告を言い

渡す・・・

私の魔法は全く訳も無く・・・

「あなたね学習してる?そんなもの私には利かない・・・
次は私の番よ・・・AKUMAよ・・・踊り狂へ・・・」

「ああつあああーーー！」

「どお?苦しい・・?そりゃそりよね・・・ふふふ・・・そ
の死にそつな顔・・・
とても綺麗だわ・・・」

「はあああああああああーーー！」

心臓が焼けるよつこ痛いーーー

でも負けるわけにはいかないの・・・この技で最後・・・

・・

そう最後・・・いろんな意味でね・・・

「もう死んじゃうの……？人間はつまんないわ～」

「残念だけどこれで終焉よ……じゃあねユリア……地獄へ行きなさい……」

「なに言つてゐの？地獄に行くのは貴方よ……？」

「こや・・・あなたよ・・・」

「・・・・・・・・・」

「The devil falls asleep」（悪魔は眠りにつけ）

「だから~利かないって言つてんじゃ・・・・・・うつ・・・

・・・
ユリアが勢いよく血を吐いた・・・終わった・・・・・・つと思つてた・

「許さないわ・・・・The angel cannot beat the devil!!!!」（天使は悪魔には勝てない！！）

「つあああつあ！」

油断しそぎた・・・しくじつたな・・・でも・・・!

お願い私の体！！後ちょっとでいいから動いてて！！

「The angel can beat the devil!」
!」（天使も悪魔を倒せる！！！）

「いやああああ！！！……私がこんな小娘に壊されるなんて……ティックキー……ロード……スキン……ジャステロ……デビット……ルルベル……私は少しは役に立てましたか？」

そういう残してユリアは消えた・・・・・もつじき私も・

「うつ・・・・・ゲホゲホ！！！・・・」

やつぱりね・・・

「Good-bye A beloved person」(セイヨウ
なり愛する人よ・・)

教団ではソモエが居なくなつた事でやはり騒がしかつた

「何でちゃんとみて置かないんですか！—！」

神田をしかるのはアレン・・神田は悲しい顔をしていた・・・

「すまねえ・・一人にしてくれ・・・」

そう言って部屋へ帰つていつた・・

「神田・・・悲しい」とがあるとこいつも一人にしてくれつて言つま
すけど

たまには相談ぐらじしてくださこよ・・・・

悲しそうにそうつぶやいたアレン・・

部屋で神田はベットで横になつていた・・

「…………」

「ま、まあ生きても私すぐ死んじゃうからなんだ

「…………」

「手紙の内容

DEAR ノア

この手紙を読んだるとき私はこのまま死んでる?

ノアを倒せるかな?

倒せたらいいな……

私がそんなにもノアにこだわるのわね

57

未来を左右する力はね・・・

私が持つには早かつたんだ

力がどんどん私の体を蝕んでいつて

このまま行くと一年ぐらいでね・・・

すぐ死ぬんだつたらノアと戦つて死んだ方がユウやエクソシストの役に立つでしょ？

そんな事いつたらアレンとかユウは怒る？

怒るよね？

「めんなさい

でも私は行きます

この世界に平和を取り戻すために

最後にEu amo novamente at&#amp;eacute;
ute; mesmo o senhor se rebeared

照れくさいから外国語で書いたよ

勉強して訳してね・・・

じやあなようなら

FROM ソモエ

「手紙終了」

「ソモエ・・・なんでこんなもん残して・・・」

読み終えた後コムイが部屋に入ってきて

ソモエが死んだと俺に告げた

予想はしていたから驚きはしなかつた

ソモエの亡骸の横にはノアの亡骸もあったそ�だ

ソモエ・・・お前はこれで満足か・・・？

「お前だけじゃねえよ・・・俺にも時間がねえ・・・」

俺は蓮の花を見た・・・

すると花びらが一枚落ちた・・・

世界平和なんてどうでもいい・・・

俺はお前のためにAKUMAを倒すだけだ

〈数年後〉

「あれから一年がすぎたけどまだ世界に平和はもうねえ・・・」

ソモエ・・・オマエが残していった言葉

「Eu amo novamente at&#amp;eacute;
e ; mesmo o senhor se rebeare d」

俺には意味がわからなかつた・・・

コムイが言つにはポルトガル語らしい・・・

そんな言葉ソモエが何処で覚えたのかわよくしらねえが

勉強したんだろうな・・・

コムイは俺に

「意味は探すんだよ・・・きみが・・・」

「と書つた・・・

分かつてゐる・・・ソモエにもさう言われてる

だから俺はポルトガル語を勉強してやっと意味を理解した・・・

「Eu amo novamente at&e acut
e ; mesmo o senhor se rebeared」

（もし生き返つたらまた私は貴方を愛すのでしよう・・・）

約束だぞ・・・ソモエ・・・

(後書き)

ふー読んでいただきありがとうございました^_^ お疲れ様です^_^
次の小説もぜひ期待していただけたらと思います^_^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7669c/>

もう一つのD灰

2010年10月14日22時12分発行